# いの流水俳壇

松尾　満津於　選

## 「当季雑詠」

**一本の五月幟や風の青**　大川　節弥

（評）一本の幟は男子成長を祝って、節句に掲げたものである。初夏の風が樹木の間を吹き抜けて、パタパタとはためく幟の音には心地よいひびきがある。五月の澄んだ大空のもとに吹く風の音を、「風の青」と眼に見える彩に変えて表現した作者の感性はするどい。

**二人静妻退院という短信**　植田　紀子

（評）「二人静」はセンリョウ科の多年草である。林の中に自生し、長楕円形の葉が対生して、四、五月頃二、三本の白い花の穂がつく。他に能楽の曲名となっている「二人静」がある。平安朝末期から鎌倉時代の初期を生きた女に「静御前」という源義経の側室が居た。義経が頼朝と不和になったことから、鎌倉側に捕らえられたがその時、義経を恋う歌として歌った歌の曲名が、「二人静」である。過剰な鑑賞は作品の風体をそこねる危険があるので省くが、「二人静」の季語を上五に据えた短信の中味は、夫婦という分身を強く意識させ、必ずしも能楽に出て来る「静御前」と無関係ではなさそうに思えるのである。

**大南風にはためくTシャツアート展**　松岡きよ子

（評）作品の産まれた場所は何処だろうと想像する。何年か前、大方町浮鞭の海水浴場に掛干しされた、Tシャツ、タオル等、見事なモダンアートに接したことを想起し成程と合点した。余分な説明がなく描写の効いた爽やかな句。

**通学の少年少女風光る**　津田　久美

（評）「風光る」とあるから新学期の始まったばかりの、幼小学校児童の通学風景であろう。この句のよさは「風光る」という季語の使い方にあると思う。「風薫る」であれば夏になるので、通学の子供に新鮮さが失せる。漸く暖かくなって吹く風に光が見えはじめるという、きめの細かい感情の配慮が通学児童を一層爽やかにする。

**初ものの筍先づは供えけり**　川村　愛

（評）平明な表現の中に万感のこもった句である。作者の心の有り様がそのまま伝わって来る。解説は不要かと思われるが、敢えて作者の心の中へ踏みこんでみると、「初ものの筍」は予定した供物ではなかったのではなかろうか。初ものだから、亡夫、亡父母へと「先づは」供えたのである。供物は無言の故人への語りかけであり、独白のおもいを伝える。人は己に似せて心に神を宿らせるというが、八十路の選者には身につまされる思いがする。

**春潮の輝きに満つ風岬**　森　洋彦

**おぼろ夜や心の底を云いそびれ**　岡本とも子

**茶の香り手摘み手揉みを命とし**　片岡　包女

**一村を尾鰭で撫づる五月鯉**　友草　水月

**梅雨ちかし生涯の帆は朽ちはじむ**　間浩太

**夏場所や茶の間は爺の桟敷なる**　竹崎　光子

**為すことの山程ありて立夏かな**　川村　博子

**檄飛ばす老は田植の見張番**　中屋　桜子

**峡わたる真鯉緋鯉や風の彩**　弘瀬うき子

**山峡の景保ちいし余花に会ふ**　川村千図子

**山里に泳ぎて頼母し鯉のぼり**　筒井　眉躬

**清らなる仁淀の川に鯉泳ぐ**　鈴木　公子

**紙のまち絵鯉も川を泳ぎおり**　石川　笑子

**西行の井戸は涸れずに花吹雪**　伊藤　たみ

**八十路なる無冠の渡世蝦蟇蛙**　松尾満津於

次題「当季雑詠」五3句

締切　毎月　15日

**問い合わせ・提出先**

吾北教育事務所

いの町上八川甲2010

☎867―2133

## 今月のこども川柳

**冬しらず　冬もしらずに　いきていく**　神谷小　2年　坂本　志織

**勉強は　目ひょうあれば　できるんだ**　伊野小　4年　弘井　七帆

**4月だね　桜にスマイル　いい笑顔**　伊野小　5年　廣瀬　聖子

**はるになり　かふんがとんで　目がかゆい**　神谷小　5年　岡村啓二郎

**春休み　うかれていると　ケガをする**　神谷小　5年　杉本　光